

目明千人盲目千人というが、千人の目明を当てにして一人の識者を無視するなと云った人あり。虚名をうって笑を買うなども云われるが、先に論じた良寛の書の素晴らしさと今尚高い評価を受けたのは誰が評定したのだろう。米庵が褒め初めたからだけではなからう。昭和初頃は良寛はひょうきんな無邪気な坊さんで無心に書いたから脱俗でよいという程度の軽い評価しか受けていなかったのに。それ以上も甚しい、三筆三蹟に次ぐというのは何故か、誰が、いやそんな達識が居るならば秋室の書を一度ご覧頂きたいと思うのである。

さりとして世間は広く不思議なもので、文徵明や董其昌、王寵にも劣らぬ程の徐文長が案外知られず塵を蒙り去った如く、秋室も百年以上塵を蒙っていた。泡の如く生じ泡の如く消え去る世の常なれど、百年、二百年後には必ずその真価を知られるもの、見るべき人が見れば必ず再び世に浮かび上る筈である。

貫名が然り、良寛然り、中国よりも日本で高く認められた張瑞図亦然りである。

中林梧竹の如き実力者の名が高まれば高まる程秋室の名が世に出る事を信じて疑わない。

聊か論が脱線した観が無いでもないが明石秋室の書についての所見をこれで終ります。  
(つづく)

……表紙に思う。……

### 東光庵の桜

所在は、佐伯市黒沢区桐ヶ原の東光庵境内。塩竈<sup>しほがま</sup>桜と呼ばれ開花は染井吉野より十日ほど早く毎年三月下旬には満開になる。

この桜は、「黒沢の桜」といって旧藩時代から有名で近在や城下などから花見客が杖をひいたと伝えられている。文豪国木田独歩は『欺かざるの記』に桜見物のため黒沢を訪れたことを記しているし、又佐藤鶴谷も『佐伯誌』に「桐原の桜樹」と記して絶讃している。

古来多くの人々の哀歓を見守り、独歩も賞で鶴谷の筆にのった当時の樹は、大正三年八月台風のため倒れたが今は二代目が立派に成長して、春毎に庵の前庭を覆うて咲き乱れるさまは、昔の姿を彷彿させる眺めである。

因みに、現在の幹周りは、向って左が一米八十糎、右の方が三米七十糎ほどである。

染 矢 勘 蔵

(佐伯市青山)